読売 俳壇

矢島渚男 選

手の指に触れ秋の海つぶやきぬ　明石市　小田慶喜

【評】体の一部分と海の一部分が触れ合う。そして大きな海のつぶやきを聞いた。象徴的な感じがする秀句である。「手の指」がいいのだ。

ふるさとは鮭上るころ帰らんか　八幡市　会田重太郎

【評】中国の詩の一節「帰りなん、いざ」が知られるが、秋は望郷の季節。作者は故郷の川を上る鮭を思う。東北か、北海道か。

ごちゃ混ぜとなる朝顔の種をとる　宝塚市　広田祝世

【評】朝顔の種を来年のためにとる。ところがどれがどれか、ごちゃまぜになってしまった。なにしろ、小さいですからね。でも何色か、どんな花が咲くか楽しみ。

本尊はガーゼで拭きぬ竹の春　熊谷市　羽鳥幸子

秋めくや練習室にチェロ低く　上尾市　小村勝子

垂髪をカチューシャに編む残暑かな　上尾市　清水昇一

肝吸いの肝の歯応え秋簾　東京都　野上卓

大根の双葉に優し今朝の雨　上田市　沓掛俊子

あれだけの花咲き柘榴実は二つ　深谷市　柴崎祥夫

ひょっとこに成りきる男村祭り　東京都　松本征枝

宇多喜代子 選

佐伯氏と薬師寺に居り秋彼岸　高島市　足立てるを

【評】秋彼岸の一日、誰とどこにいるのかが分かる。人名と場所、この固有名詞をうまく生かしたことで秋彼岸に集う人たちの一日の様子までが窺える。

淋しき日淋しき声の小鳥来る　東京都　山田真理子

【評】自分に淋しいことのあった日。楽しいはずの小鳥の鳴き声までが淋しく聞こえる。生きている日にはこんなこともある、と思わせる句。

裏返し又裏返し稲を干す　千歳市　鶴谷雪子

【評】稲刈を済ませ刈稲を稲架に懸け天日に干す。この作業を幾度か繰り返す。現今、見ることが少なくなったが稲作の戸外最後の作業。

秋の蟬舌打ちをして鳴き止みぬ　横浜市　小林千秋

ゆったりと羽ゆっくりと秋の蝶　我孫子市　森住昌弘

雨の日の水泳教室声高き　南房総市　山根徳一

風のなき夜の匂や稲の花　千葉市　中村重雄

稲うねり稲荷の幟揺れにけり　海老名市　山田山人

爽やかに朝の雨音満ちる室　ふじみ野市　清水逸龍

教室に立ちこめている残暑かな　土浦市　今泉準一

正木ゆう子 選

秋深む眼耳鼻舌身に感ず　横浜市　小野寺洋

【評】眼耳鼻舌身は五感。それに意（意識）を加えて六根といい、般若心経に出て来るので、わりあい親しみのある言葉だ。作者は写経を習慣にしておられるのかもしれない。

解体の後や見知らぬ秋の空　東京都　徳山麻希子

【評】大きな建物が解体されて更地になると、町の風景が変わる。ああこの町にもこんな大空があったのか。建物は再び建つのだけれど。

菩提子や語り部といふ抑止力　さいたま市　関根道豊

【評】語り部の存在は、時代の重石となって、出来事を風化させない。祈りのための数珠となる菩提子が、一句に神聖な雰囲気を冠している。

群鰯一心となりひるがへる　町田市　枝沢聖文

梅楷の火保ちを恃む芋煮かな　東京都　望月清彦

とんぼうやコンビニ一つ寺三つ　土浦市　小川智昭

古地図にもある銭湯や小鳥来る　志木市　谷村康志

秋霖や針すべらせてサテン縫う　名古屋市　渡辺淳子

落鮎の背鰭に川藻残したり　横浜市　小林敏和

北岳か雲か山雀鳴くばかり　川崎市　沼田広美

小澤實 選

引き抜きし案山子胸へともたれけり　北本市　萩原行博

【評】稲刈りを終えた後、畦の案山子を引き抜いた。それが作中主体の胸へともたれかかってきた。半年間畦に立ち、鳥獣を追い払ってくれた労を思い、しっかりと受け止めるのだ。

稲架を組む兄は天辺我は地に　海老名市　加藤岡完

【評】稲架は刈り取った稲の束を乾燥させるための木組み。兄と協力し組んでいく。それぞれの位置を示したのもイメージしやすいところだ。

屋台椅子足元に鳴く虫去らず　香芝市　中村翠孝

【評】静かな場所の屋台で、静かに一人で飲んでいる。近くで虫が鳴いていて、これも肴。飲んでいる酒は日本酒の冷か、沁みることだろう。

数億の露の光や堤土手　伊万里市　田中秋子

冷まじや身幅の間歩に鑿の痕　国分寺市　野々村澄夫

オムレツにバターたっぷりやっと秋　神戸市　吉野勝子

年上の生徒に諭す夜学の師　東大阪市　梶田高清

とんとんと上る二階や虫の声　和泉市　山崎文恵

昼時のピザ屋にぎはふ残暑かな　東京都　栗山あさ

剝がれゆく古墳の壁画秋の声　川越市　横山由紀子

晶子と震災

短歌あれこれ　松村由利子（歌人）

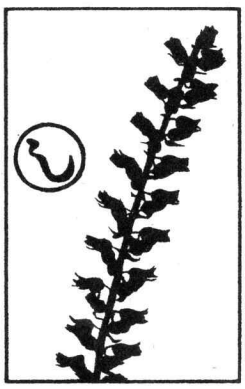
100年前の関東大震災は、地震の規模が大きかっただけでなく、火災による被害が甚大だった。歌人、与謝野晶子も大きな痛手を被った一人である。

千代田区富士見に住んでいた晶子は強い揺れに不安を感じ、一家で外堀の土手に避難し、2晩野宿したという。後に「大火が半町（約55㍍）の近く」まで迫った恐怖を記している。

幸い自宅は無事だったが、勤務先の文化学院が火災に遭い、預けていた大量の原稿も焼失してしまった。

十余年わが書きためし草稿の跡あるべしや学院の灰　『瑠璃光』

「草稿」は、完成間近だった「源氏物語講義」の原稿と見られる。この歌には深い悲嘆が滲むが、彼女は再び15年かけて『新新訳源氏物語』を完成させる。いつの時代にも大災害は起きるが、私たちも晶子に倣って悲しみを乗り越え、新たな一歩を踏み出すしかないのだろう。



題字デザイン・イラスト　福田美蘭